

中国人青年における文化的価値観とアレキシサイミア傾向の関連に対する検討

黄, 元正
九州大学大学院人間環境学府

寺澤, 悠理
慶應義塾大学文学部心理学専攻

<https://doi.org/10.15017/7409201>

出版情報：九州大学心理学研究. 27, pp.13-21, 2026-03-05. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



中国人青年における文化的価値観とアレキシサイミア傾向の関連に対する検討¹⁾

黄 元正 九州大学大学院人間環境学府
寺澤 悠理 慶應義塾大学文学部心理学専攻

An Examination of the Relationship between Cultural Values and Alexithymia among Chinese Adolescents

Yuanzheng Huang (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

Yuri Terasawa (Department of Psychology, Keio University)

Alexithymia is a multifaceted personality construct characterized by difficulties in identifying and describing emotions. Previous studies have argued that, among the multiple components of alexithymia, externally oriented thinking (EOT) is the only one related to Euro-American values. The current study examines whether, among three components of alexithymia, only EOT is related to Euro-American values. The study used survey data from 62 Chinese participants, who completed (a) image tasks measuring Euro-American values, (b) measures of Euro-American values (ICS), and (c) measures of alexithymia (TAS-20). A relationship was found between individuals' total scores of alexithymia and Euro-American values, while no relationship was found between EOT and Euro-American value. These results show that EOT may not be the only component of alexithymia related to Euro-American values.

Key Words: Alexithymia, Culture, Chinese, Emotion, Recognition

目的

アレキシサイミア (Alexithymia) とは、自分の感情に気づくことや表現することが困難であること、空想力が乏しいこと、内面よりも外界の事実へ注意を向けやすいことなどを特徴とする心理的概念であり (Sifneos, 1973)、精神科医である Sifneos が心身症患者によく見られる特徴をまとめ概念化したものである。

現在アレキシサイミアは、精神疾患に特有のものではなく、非臨床群にも存在する連続的な特性と捉えられ (Taylor et al, 1997)、感情の取り扱いにおける困難を特徴とするパーソナリティ特性を表わす「アレキシサイミア傾向」として多くの研究がなされている (松下・石田, 2012)。アレキシサイミア傾向を測定するのによく使われる質問紙である The twenty-item Toronto Alexithymia scale (TAS-20) には、感情の同定困難 (DIF: difficulty identifying feelings)、感情の伝達困難 (DDF: difficulty describing feelings)、外的志向 (EOT: externally oriented thinking) の3つの下位尺度が設けられている。なお DIF は自分の感情に対する気付きやラベリングの困難を指し、DDF は自分の感情を表現して他人に伝えることの困難を指し、EOT は自分の内面よりも外的な事実へ注意を向ける傾向を指す。

先行研究によると、3つの下位尺度の中で、EOT は特に文化の影響を受けることがわかっている。Ryder et al. (2008) は中国のうつ病患者と北米のうつ病患者のアレキシミア傾向を TAS-20 を使って比較し、中国のうつ病患者は北米のうつ病患者よりアレキシミア傾向が強く、下位尺度を分析すると DIF 得点と DDF 得点は変わらないが、EOT 得点に差がみられることを明らかにした。Ryder et al. (2008) は、Markus & Kitayama (1991) の「文化的自己観」概念を用いて文化の影響を受けっていると指摘し、北米のうつ病患者は、西洋文化によく見られる相互独立的自己観をもっていることによって、個人の内面に注意を向けることを促進し、北米のうつ病患者の EOT が中国のうつ病患者より低かったと考察している。

Dere et al. (2012) は Ryder et al. (2008) の結果を踏まえて、EOT と文化の関連性についてさらに検討し、欧米文化では個人の感情経験や感情表出が重要視されるため個人の内部への注意が促され、低い EOT 得点に繋がるという仮説を立てた。Dere et al. (2012) は、ヨーロッパ系カナダ大学生と中国人カナダ大学生を対象に、TAS-20 でアレキシサイミア傾向を測定し、EAVS-AA-R (European American Values Scale for Asian Americans-Revised) で欧米的価値観を測定した。その結果、中国人カナダ大学生はヨーロッパ系カナダ大学生より TAS-20 の EOT 得点が高く、ヨーロッパ系カナダ大学生グルー

¹⁾ 本論文は第1著者が令和4年に慶應大学文学部へ提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

ブと中国人カナダ大学生グループの両方で、欧米的価値観はEOTのみを予測し、欧米的価値観を持つほどEOT得点が低かった。この結果は、Ryder et al. (2008)と一致し、欧米文化は低いEOT得点に繋がることを意味し、EOTが文化の影響を受けるという仮説を支持した。その理由について、Dere et al. (2012)はTAS-20の3因子の中で、DIF、DDFの2因子は感情に関わる機能の欠陥を表す病理的なものであるのに対し、EOTは感情に対する個人の考え方を示すものであるため、EOTは他の2因子と違って文化の影響を受けると解釈した。また、Dere et al. (2013)は中国人うつ病患者を対象に、Dere et al. (2012)と同じ方法で研究を行い、先行研究と一致した結果が得られている。

しかし質問紙による文化的価値観の測定は、参加者の主観に影響されやすい可能性がある。そこで、筆者らは、より客観的な方法であり、感情評定過程に対する文化の影響を検討するために用いられてきた「表情判断タスク」(Masuda et al., 2008)を用いて欧米的価値観がEOTのみに影響することが明らかにできるのではないかと着想した。

「表情判断タスク」(Masuda et al., 2008)とは、コンピュータ画面上に5人の人物を提示し、その画面の中心にいる人物の表情から、その人物が感じている感情を参加者に判断を求める課題である。我々は、日常生活において、ある人の感情を理解する際に、その人の表情のみならず、場の雰囲気を読むことも重要であるが、そのような表情判断には文化差があることが明らかになっている。Masuda et al. (2008)では、中心人物と背景人物が描かれた画像を用いて感情判断を求めた結果、アメリカ人の参加者は中心人物の表情のみに基づいて感情を判断する傾向が認められた。一方、日本人参加者は、中心人物の感情を判断する際に、背景人物の表情の影響を受ける傾向が認められた。この結果について、Masuda et al. (2008)は、Markus & Kitayama (1991)が提案した文化的自己観を用いて説明した。Masuda et al. (2008)の説明によると、相互独立的自己観をもつことが一般的であるアメリカにおいて、感情は個人内部の属性として捉えられ、個人の感情表出は個人の実際の感情を反映する傾向があるため、判断対象の表情から感情を判断する際、対象人物一人の表情だけを見れば、十分に正確な感情判断が可能である。そのため、アメリカ人は中心人物の感情を判断する際、日本人に比べ背景人物の表情の影響を受けない。一方で、相互協調的自己観をもつことが一般的である日本において、感情は人間関係の中から生まれるものとして捉えられる。相互協調的自己観を有する個人にとって、自分の感情は独立して存在するものではなく、他の個人から切り離せないものである。そのため、日本では判断対象の表情から感情を判断する際、対象人

物一人の表情だけを見るだけでは不十分であり、その場にいる他者の表情から情報を獲得する必要があると考えられる。したがって、日本人は中心人物の感情を判断する際に、アメリカ人より背景人物の表情の影響を受ける。

このように、感情判断過程には文化的価値観が反映される可能性があるが、一方で、文化的価値観の研究では質問紙法が広く用いられてきた。質問紙法は自己報告に基づく手法であり、回答者の主観や社会的望ましさによるバイアスの影響を受けやすいという限界が指摘されている(小嶋, 1975)。これに対し、本研究が用いた表情判断タスクは、参加者の意識的判断を介さずに、感情認知の過程を通して文化的価値観を間接的に測定できるため、より行動指標に近い形で文化差を検討できると考えられる。

アレキシサイミア傾向が表情判断タスクの遂行成績に影響する可能性も考えられるが、日本ではアレキシサイミア傾向と表情認識能力の関連は報告されていない。小塚(2005)は日本人参加者を対象に、参加者をTAS-20得点によって高アレキシサイミア群と低アレキシサイミア群に分類し、6種類の異なる感情を表出した顔写真を提示し、各写真の人物が経験している感情を特定するよう求めた。その結果、高アレキシサイミア群と低アレキシサイミア群の表情認識能力に有意な差は認められなかった。また海外の研究では、Parker et al. (1993)が、TAS-20得点によって参加者を高アレキシサイミア群・中アレキシサイミア群・低アレキシサイミア群に分類した後、9種類の異なる感情を表出した顔写真を提示し、各写真の人物が経験している感情を特定するよう求めた。その結果、高アレキシサイミア群に分類された参加者は、低アレキシサイミア群の参加者と比べて表情認識能力が有意に低いことが示された。しかし、その後の研究ではアレキシサイミア傾向と表情認識能力の関連が認められず(Mann et al., 1994; Pandey & Mandal, 1997)、アレキシサイミア傾向と表情認識能力の関連については一貫した知見が得られていない。

以上のように、先行研究ではアレキシサイミア傾向と表情認識能力の関連について一貫した知見が得られておらず、アレキシサイミア傾向が表情判断タスクの遂行成績に影響を及ぼすという確かな根拠は示されていない。そこで本研究では、表情判断タスクにより文化的価値観を測定することを試み、さらにその結果とアレキシサイミア傾向との関連を調べることを目的の一つとした。

また、筆者らは、欧米的価値観、アジア的価値観などの文化的価値観を包括的かつ相対的に理解するために、本研究では、Triandis (1995)の横型個人主義、縦型個人主義、横型集団主義、縦型集団主義という4つの概念を採用した。Triandis (1995)によれば、縦型集団主義

とは、個人を集団の一部として見なし、集団内の不平等を認める傾向である。横型集団主義とは、個人を集団の一部として見なし、集団内の平等を強調する傾向である。縦型個人主義とは、個人を自主的なものとして捉え、集団内の不平等を認める傾向である。横型個人主義とは、個人を自主的なものとして捉え、集団内の平等を強調する傾向である。欧米では横型個人主義、縦型個人主義が一般的であるとされ、アジアでは横型集団主義、縦型集団主義が一般的であるとされる。

先行研究では、文化的価値観とアレキシサイミア傾向の関連を検討する際に、文化的価値観として「欧米的価値観」と「アジア的価値観」という分類軸が用いられることが多かった。しかし、Triandis (1995) の概念を用いることで、先行研究の「欧米的」「アジア的」という視点を踏まえつつ、「縦型・横型」「個人主義・集団主義」という観点を採用することにより、より精緻に文化的価値観を検討することが可能である。Triandis (1995) によると、欧米では横型個人主義、縦型個人主義が一般的である。したがって、横型個人主義および縦型個人主義は「欧米的価値観」として位置づけられると考えられる。

Dere et al. (2012) および Dere et al. (2013) において、欧米的価値観が強いほどアレキシサイミアの外的指向性が低いという結果が示されていることから、横型個人主義または縦型個人主義の傾向が強い個人ほど、EOTは低いと考えられる。

本研究は、多様な文化的背景を有する中国人青年を対象に、まず感情評定過程に対する文化の影響を検討するために用いられてきた「表情判断タスク」(Masuda et al. (2008)) により文化的価値観とアレキシサイミア傾向の関連を検討し、先行研究が示した「TAS-20の3因子のうち欧米的価値観がEOTのみに影響すること」という現象が再現されるかどうかを確認することを目的とする。また、Triandis (1995) が提唱した個人主義・集団主義の概念を文化的変数として用い、それらとアレキシサイミア傾向との関連を検討する。

なお、対象を中国人青年とした理由は、中国は伝統的にアジア的価値観が広く受け入れられてきたが、近年では教育や海外での生活経験の影響により、急速に欧米的価値観を持つ青年が増加しており、COVID-19下でも調査が可能で、文化的価値観の多様性を有し、アレキシサイミア傾向との関連を明らかにしやすい対象と考えられたためである。

本研究の仮説は、表情判断タスクでは、参加者が中心人物の感情を判断するとき背景人物の影響を受けないほど、欧米的価値観を持ち、EOT得点が低い、また横型個人主義得点、縦型個人主義得点が高いほど、EOT得点が低いとした。

方法

表情判断タスクの画像刺激作成と予備調査

表情判断タスクの画像刺激作成 Masuda et al. (2008) を参考に、合計 25 枚の画像刺激を作成した。まず 5 人の人物それぞれの喜び表情、悲しみ表情、怒り表情の画像を作成した。これらの人物画像の妥当性は、後述する予備調査で検討した。その後、5 人の人物の画像を組み合わせて、1 人の中心人物と 4 人の背景人物で構成される画像刺激 25 枚を作成した。5 人の人物それぞれを中心人物とした画像刺激を 5 枚ずつ作成し、各画像刺激において中心人物となった人物以外の 4 人の人物を背景人物とした。画像刺激において、背景人物の表情の種類は常に揃っていた。中心人物と背景人物の表情が一致する画像と一致しない画像の 2 種類があった。中心人物の表情は喜びと悲しみの 2 種類で、背景人物の表情は喜び、悲しみ、怒りの 3 種類であった。したがって、中心喜び背景喜び条件、中心喜び背景悲しみ条件、中心喜び背景怒り条件、中心悲しみ背景悲しみ条件、中心悲しみ背景喜び条件の 5 種類の画像が 5 枚ずつあった。Masuda et al. (2008) では、中心人物表情が喜び、悲しみ、怒りの 3 種類の画像が作成された。一方で、本研究では、試行数を可能な限り抑えて参加者の負担を軽減するため、中心人物の表情が喜びと悲しみの 2 種類のみの画像を作成し、怒りの表情を示す画像を作成しなかった。この理由として、Masuda et al. (2008) の研究では、中心人物の表情が喜びや悲しみの場合と比べて、怒りの場合には、日本人参加者の中心人物に対する感情判断が背景人物の表情から受ける影響が弱いことが示されている。Masuda et al. (2008) はこの結果について、公共の場で怒りの表情を示すことは、日本のような集団の調和を重んじる相互協動的な社会では強く抑制されるため、日本人は「他者が怒りの表情を示すときは、本当に怒っている場合に限られる」と考える傾向があり、そのため怒り表情を判断する際に他者の表情を参考にする必要がないと解釈している。本研究は、中心人物の感情を判断する際に背景人物の表情の影響をどの程度受けるかを測定することによって、文化的価値観を測定することを目的としている。したがって、以上の Masuda et al. (2008) の知見を踏まえ、感情判断において背景人物の影響を受けにくい中心怒り条件は省略し、中心喜び条件および中心悲しみ条件の画像のみを作成した。Fig.1 は画像刺激のサンプルである。

予備調査 表情判断タスクの画像刺激について予備調査を行った。画像刺激の 5 人の人物の喜び、悲しみ、怒り表情は確実に喜び、悲しみ、怒りの感情を反映できたかを確認するため、男性 3 人女性 5 人合計 8 人の参加者に判定を依頼した。画面中央に 1 名の人物が提示され、



Fig.1

画像刺激のサンプル。上図は中心喜び背景喜び条件の例である。下図は中心喜び背景怒り条件の例である。

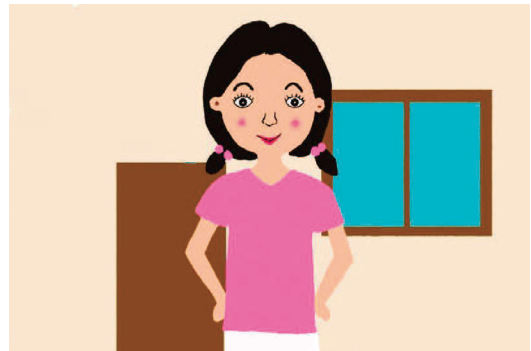


Fig.2

予備調査で使用したアニメーション画像刺激のサンプル。上図は喜び表情の例である。下図は怒り表情の例である。

参加者はその人物の喜び・悲しみ・怒りの程度を、それぞれ0～9の10段階で評価するよう求められた。予備調査は合計15試行を行った。5人の人物それぞれの喜び、悲しみ、怒り表情が1度ずつ提示された。Fig.2は予備調査に使用した画像刺激のサンプルである。8人のデータを使い、5人の人物の各表情の喜び、悲しみ、怒りの程度に対する8人の評価点の平均点を算出した。すべての人物のすべての表情において、その表情に対応する感情の評価得点が他の感情の評価得点より顕著に高かったため、画像刺激に使用した5人の人物の表情は確実に目的とした感情を反映していたと考えられる。したがって、これらの人物画像で本調査で使用する画像刺激を作成した。

本調査

参加者 平均年齢22.4歳(SD=2.2歳)の中国語を母語とする参加者62人で、最大年齢は29歳、最小年齢は18歳、性別は女性30人、男性31人、その他1人であった。参加者が生活していた地域が参加者の文化的価値観に影響を及ぼすと考えられるため、参加者の海外居住経験に関する情報を収集した。なお本研究は中国人青年を

対象にしたため、ここでいう「海外」とは中国以外の国や地域を意味する。本研究の参加者62人の内、16人は中国以外の国や地域での居住経験がなく、46人は中国以外の国や地域での居住経験があった。

刺激と質問紙 表情判断タスクでは、予備調査を経て妥当性が確認された人物画像から作成された合計25枚の画像刺激を使用した。参加者の横型個人主義、縦型個人主義、横型集団主義、縦型集団主義の傾向を測定するため、Singelis, Triandis, Bhawuk & Gelfand (1995)が作成した、横型個人主義、縦型個人主義、横型集団主義、縦型集団主義の4因子があるThe Individualism and Collectivism Scale (ICS)を使用した。中国語版は筆者らが作成し、英語に精通する中国語母語話者2名によってチェックされた質問紙を使用した。TAS-20はYuan et al. (2003)が作成したTAS-20中国語版を使用した。なお、調査実施時には、伝統的男性らしさイデオロギーとアレキシサイミア傾向との関連についても探索的に検討する目的で、伝統的男性らしさイデオロギーを測定する質問紙Male Role Norms Inventory-Revised 35 (Liu et al., 2018)を併せて記入を求めた。しかし、その結果は本研究の主題である欧米的価値観とアレキシサイミア傾向の関連と

は直接の関連を持たないため、分析からは除外した。
 手続き オンライン調査を実施した。調査は第1部と第2部に分かれていた。第1部の最初に参加者に画像サイズと画面から目までの距離を調整させるページ（画像サイズ調整ページ）が提示された。画像サイズ調整ページにおいて、赤い四角形の画像が提示され、赤い四角形の辺長が2.7センチから3.3センチの範囲に入るように画像のサイズを調整することが参加者に求められた。また、パソコン画面中央と目の距離を50 cmに保つよう参加者に求めた。調査の第1部は合計25試行の表情判断タスクであった。各試行では、作成した25枚の画像刺激のうち1枚がランダムな順序で提示され、参加者は中心人物が感じている喜び・悲しみ・怒りの程度を、それぞれ0～9の10段階で評価した。第2部ではICS, MRNI-R35, TAS-20, 参加者の年齢、性別、海外居住経験に関する質問を順番に提示し、参加者に記入を求めた。

結果

記述統計

表情判断タスクにおいて、画像サイズ及び目から画面までの距離を調整できなかった参加者4人と、中心人物の表情に対して全部最高点9点で評価した参加者3人と、全項目に対する5点で評価した参加者1人のデータを除外し、54人の参加者のデータで統計処理を行った。画像タスクに対する評価点に対して統計分析を行うとき、

中心人物の表情に対応する感情の評価点のみが使用された。つまり、5条件の画像の中で、中心喜び背景喜び条件、中心喜び背景悲しみ条件、中心喜び背景怒り条件に対して、中心人物の表情の喜び程度に対する評価点を中心人物に対する感情評定値として分析に使用した。中心悲しみ背景悲しみ条件、中心悲しみ背景喜び条件に対して、中心人物の表情の悲しみ程度に対する評価点を中心人物に対する感情評定値として分析に使用した。Table 1に表情判断タスク5条件の中心人物に対する感情評定値の平均値と標準偏差を示した。ICS得点とTAS-20得点についても同じく54人の参加者のデータで統計処理を行った。Table 2は参加者54人のICS得点の平均値と標準偏差を示した。Table 3は54人のTAS-20の得点の平均値と標準偏差を示した。

表情判断タスクの単回帰分析

54人のデータを使用して、参加者ごとに中心人物と背景人物の表情が一致する条件と一致しない条件で、中心人物の感情に関する評定値の得点差を求めた。具体的には（A）中心喜び背景喜び条件における中心人物表情の喜び程度得点から中心喜び背景悲しみ条件における中心人物表情の喜び程度得点を引いた得点差、（B）中心喜び背景喜び条件における中心人物表情の喜び程度得点から中心喜び背景怒り条件における中心人物表情の喜び程度得点を引いた得点差、（C）中心悲しみ背景悲しみ条件における中心人物表情の悲しみ程度得点から中心悲しみ背景喜び条件における中心人物表情の悲しみ程度得

Table 1
各条件の中心人物感情評定値の平均値と標準偏差

条件	平均値	標準偏差
中心喜び背景喜び（喜び得点）	6.19	1.25
中心喜び背景悲しみ（喜び得点）	6.03	1.21
中心喜び背景怒り（喜び得点）	5.90	1.37
中心悲しみ背景悲しみ（悲しみ得点）	6.51	1.09
中心悲しみ背景喜び（悲しみ得点）	6.65	1.18

Table 2
ICS 得点の平均値と標準偏差

	横型個人主義	縦型個人主義	横型集団主義	縦型集団主義
平均値	40.46	32.43	34.52	30.57
標準偏差	5.64	7.71	10.88	8.38

Table 3
TAS-20 の平均値と標準偏差

	DIF	DDF	EOT	総得点
平均値	17.98	13.52	18.54	50.04
標準偏差	5.53	4.07	4.42	11.71

点を引いた得点差を求めた。この操作によって、中心人物の感情評定に背景人物の表情が影響した程度を評価した。これらの得点と TAS-20 得点を用いて、回帰分析を実施した。その際、①得点差の絶対値を独立変数とする分析、②得点差が正の数または 0 である参加者のデータのみを用いた分析、③得点差が負の数または 0 である参加者のデータのみを用いた分析を行い、いずれの分析においても、得点差を独立変数、DIF 得点、DDF 得点、EOT 得点、TAS-20 総得点を従属変数とした単回帰分析を行った。

②得点差が正の数または 0 である参加者のデータのみを用いた分析、③得点差が負の数または 0 である参加者のデータのみを用いた分析の目的を以下に述べる。同一データに対して複数の分析を行うことは統計的に望ましくないが、本研究では、表情判断タスクにおいて中心人物の感情を判断する際に背景人物の表情から受ける影響の方向性を探索的に検討するため、②および③のように、影響の方向性ごとに参加者を分類して分析を行った。中心喜び背景喜び条件における中心人物表情の喜び程度得点から中心喜び背景悲しみ条件における中心人物表情の喜び程度得点を引いた得点差が正の数または 0 である参加者は 36 人で、得点差が負の数または 0 である参加者は 25 人であった。中心喜び背景喜び条件における中心人物表情の喜び程度得点から中心喜び背景怒り条件における中心人物表情の喜び程度得点を引いた得点差が正の数または 0 である参加者は 34 人で、得点差が負の数または 0 である参加者は 26 人であった。中心悲しみ背景悲しみ条件における中心人物表情の悲しみ程度得

点から中心悲しみ背景喜び条件における中心人物表情の悲しみ程度得点を引いた得点差が正の数または 0 である参加者は 26 人で、得点差が負の数または 0 である参加者は 35 人であった。

その結果、中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件を比較して、得点差が負の数か 0 である参加者のデータを用いた単回帰分析において TAS-20 の得点の有意な関連が認められた。中心人物に対する感情判断が背景人物の表情の影響を受けるほど、DIF 得点が減少した ($B=-3.38$, $\beta=-0.39$, $t=2.10$, $p<0.05$)。決定係数 $R^2=0.16$ であった。

ICS の単回帰分析

54 人のデータを用いて、ICS の横型個人主義得点、縦型個人主義得点、横型集団主義得点、縦型集団主義得点それぞれを独立変数とし、DIF 得点、DDF 得点、EOT 得点および TAS-20 総得点を従属変数とした単回帰分析を行った。縦型個人主義得点が増加するほど、DIF 得点が増加し ($B=0.30$, $\beta=0.41$, $t=3.25$, $p<.01$)、決定係数は $R^2=0.17$ であった。縦型個人主義得点が増加するほど、DDF 得点が増加し ($B=0.175$, $\beta=0.33$, $t=2.51$, $p<.05$)、決定係数 R^2 は 0.11 であった。縦型個人主義得点が増加するほど、TAS-20 総得点が増加し ($B=0.61$, $\beta=0.40$, $t=3.16$, $p<.01$)、決定係数 $R^2=0.16$ であった。

重回帰分析

表情判断タスクの 3 つの得点差の絶対値、ICS 得点、TAS-20 得点の相関行列を Table 4 に示した。

Table 4
画像タスク結果、ICS 結果、TAS-20 結果の相関行列

	HH-HS	HH-HA	SS-SH	横型個人主義	縦型個人主義	横型集団主義	縦型集団主義	DIF	DDF	EOT	TAS-20 総得点
HH-HS	—										
HH-HA	.34 *	—									
SS-SH	.25	.05	—								
横型個人主義	.11	.32 *	.26	—							
縦型個人主義	.11	.19	.16	.30 *	—						
横型集団主義	-.25	-.17	-.03	-.13	-.03	—					
縦型集団主義	.11	-.04	.13	.05	.29 *	.53 **	—				
DIF	-.10	-.04	.07	-.18	.41 *	-.05	.04	—			
DDF	-.07	.06	-.04	-.17	.33 *	-.23	-.03	.74 **	—		
EOT	.02	-.03	.10	-.15	.24	-.08	.03	.42 **	.46 **	—	
TAS-20 総得点	-.07	-.01	.06	-.20	.40 **	-.13	.02	.89 **	.87 **	.74 **	—

注) HH-HS= 中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景悲しみの差の絶対値

HH-HA= 中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差の絶対値

SS-SH= 中心悲しみ背景喜び悲しみ条件と中心悲しみ背景喜び条件の差の絶対値

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) である。

**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) である。

相関行列の結果から、いくつかの変数間に有意な相関が示唆されたため、表情判断タスクの3つの得点差の絶対値、ICSの4つの得点を独立変数として、DIF得点、DDF得点、EOT得点およびTAS-20総得点それぞれを従属変数とした重回帰分析を実施した。

表情判断タスクの3つの得点差の絶対値、ICSの4つの得点を独立変数、DIF得点を従属変数とした重回帰分析の結果、モデル全体は有意であった ($F(7, 46) = 2.96, p < .05$)。決定係数は $R^2 = 0.31$ であり、独立変数が従属変数の31%を説明した。すべてのVIFは2.5以下であり、共線性の問題は認められなかった。各独立変数の結果を見ると、横型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = -0.36, \beta = -0.37, p < .05$)、横型個人主義得点が増加するほどDIF得点が減少した。縦型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = 0.38, \beta = 0.53, p < .01$)、縦型個人主義得点が増加するほどDIF得点が増加した。

表情判断タスクの3つの得点差の絶対値、ICSの4つの得点を独立変数、DDF得点を従属変数とした重回帰分析の結果、モデル全体は有意であった ($F(7, 46) = 2.66, p < .05$)。決定係数は $R^2 = 0.29$ であり、独立変数が従属変数の29%を説明していた。すべてのVIFは2.5以下であり、共線性の問題は認められなかった。各独立変数の結果を見ると、横型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = -0.26, \beta = -0.36, p < .05$)、横型個人主義得点が増加するほどDDF得点が減少した。縦型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = 0.22, \beta = 0.41, p < .01$)、縦型個人主義得点が増加するほどDDF得点が増加した。横型集団主義得点は有意な効果を示し ($B = -0.12, \beta = -0.33, p < .05$)、横型集団主義得点が増加するほどDDF得点が減少した。

表情判断タスクの3つの得点差の絶対値、ICSの4つの得点を独立変数、EOT得点を従属変数とした重回帰分析の結果、モデル全体は有意ではなく ($F(7, 46) = 1.1, p = .39$)、決定係数は $R^2 = 0.14$ であった。したがって、本モデルは従属変数を十分に説明していないと考えられる。

表情判断タスクの3つの得点差の絶対値、ICSの4つの得点を独立変数、TAS-20総得点を従属変数とした重回帰分析の結果、モデル全体は有意であった ($F(7, 46) = 3.23, p < .01$)。決定係数は $R^2 = 0.33$ であり、独立変数が従属変数の33%を説明していた。すべてのVIFは2.5以下であり、共線性の問題は認められなかった。各独立変数の結果を見ると、横型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = -0.85, \beta = -0.41, p < .01$)、横型個人主義得点が増加するほどTAS-20総得点が減少した。縦型個人主義得点は有意な効果を示し ($B = 0.78, \beta = 0.51, p < .01$)、縦型個人主義得点が増加するほどTAS-20総得点が増加した。

考察

本研究は、多様な文化的背景を有する中国人青年を対象に文化的価値観とアレキシサイミア傾向の関連を検討し、先行研究が示した「欧米的価値観がTAS-20の3因子のうちEOTのみに影響する」という現象が再現されるかを確認することを目的とした。その際に欧米的価値観を測定する表情判断タスクとICSを中国人青年の参加者に回答させ、それらの結果とTAS-20得点の関連を検討した。DIF、DDF、EOTの中で、EOTだけが欧米的価値観と関連し、欧米的価値観を持つほどEOT得点が低いという仮説を立てた。

中心人物に対する感情判断とアレキシサイミア傾向

表情判断タスクの結果は、TAS-20得点との関連をほとんど示さなかった。本研究では、表情判断タスクの結果が参加者の文化的価値観を反映し、中心人物の感情判断において背景人物の影響を受けにくいほど欧米的価値観を持つと仮定した。しかし、得られた結果は「欧米的価値観を持つほどEOT得点が低い」という仮説を支持しなかった。

また、表情判断タスクの結果はDIF得点、DDF得点いずれとも関連を示さず、TAS-20得点全般との関連も認められなかった。Table 4の相関行列では、中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差の絶対値と横型個人主義の間に有意な正の相関が示されたことから、中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差は、横型個人主義と関連がある何かの文化的価値観を捉えた可能性が考えられる。この結果から、背景人物が喜び表情の時に、背景人物が怒り表情よりも中心人物を喜んでいるように感じることは、横型個人主義と正の相関がある何かの文化的価値観を反映しているが、その文化的価値観はアレキシサイミア傾向と関連がないことが考えられる。横型個人主義を「欧米的価値観」として考えるなら、これはMasuda et al. (2008)の主張と逆方向の結果である。以上により、表情判断タスクの中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差は何かの文化的価値観を捉えたが、それは仮説で想定した欧米的価値観と異なる文化的価値観であり、アレキシサイミア傾向と関連がない何かの文化的価値観だと考えられる。そのため、中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差がTAS-20得点と関連を示さなかったと考えられる。これらの結果から、表情判断タスクを文化的価値観の測定方法として用いることの妥当性については、さらなる検討が必要である。この点については、本研究の限界のところで詳しく論じる。

表情判断タスクにおいて、中心人物の感情を判断する際に背景人物の表情の影響を受ける場合、その影響の方

向性について検討する必要がある。Masuda et al. (2008) は、中心人物の表情が喜びである条件において、背景人物の表情が喜び以外の場合よりも喜びである場合に、日本人参加者が中心人物の喜びの程度をより高く評価する傾向を報告している。一方で、Masuda et al. (2008) は、中心人物の表情が悲しみまたは怒りである条件において、中心人物の感情判断に及ぼす背景人物の表情の影響の方向性については言及していない。したがって、表情判断タスクの結果を解釈する際には、中心人物の感情を判断する際に背景人物の表情から受ける影響の方向性を考慮し、慎重に解釈を進める必要があると考えられる。

横型個人主義、縦型個人主義とアレキシサイミア傾向

横型個人主義得点は単回帰分析では TAS-20 得点との関連を示さなかったが、重回帰分析では横型個人主義得点が高いほど DIF 得点、DDF 得点、および TAS-20 総得点が低下するという結果が得られた。単回帰分析で有意な効果がみられず、重回帰分析で有意な効果が示されたことから、他の独立変数の影響を統制することによって、横型個人主義のアレキシサイミア傾向に対する独自の影響が明らかになったと考えられる。横型個人主義は一般に「欧米的」とされるが、本研究の結果からは、横型個人主義得点の増加が DIF 得点、DDF 得点、および TAS-20 総得点の低下に結びつくことが示され、横型個人主義がアレキシサイミア傾向の DIF、DDF 特性に影響を及ぼす可能性が示唆された。

単回帰分析と重回帰分析において、縦型個人主義得点が増加するほど、DIF 得点、DDF 得点、TAS-20 総得点が増加した。この結果は、縦型個人主義得点が増加するほど EOT 得点が減少するという仮説を支持せず、欧米的価値観を持つほどアレキシサイミア傾向が弱くなるという先行研究の主張にも一致しなかった。

ここで、Singelis, Triandis, Bhawuk & Gelfand (1995) による ICS の縦型個人主義項目を詳細に確認すると、8 項目のすべてが「競争心」に関する質問で構成されており、競争心が強いほど縦型個人主義傾向が高いと評価される仕組みになっていることが分かる。すなわち、ICS の縦型個人主義項目は「競争心」という要素のみに焦点を当てており、競争心とアレキシサイミア傾向の DIF・DDF 得点との間に強い正の相関が存在するため、本研究では縦型個人主義得点が高いアレキシサイミア傾向を予測する結果となったと考えられる。したがって、競争心とアレキシサイミア傾向の関連については今後さらに検討する必要がある。また、「競争心」要素だけでなく、縦型個人主義をより包括的に測定できるよう ICS の項目を見直すことが求められる。もし包括的に縦型個人主義を測定できれば、「欧米的」とされる縦型個人主義はアレキシサイミア傾向と負の関連を示す可能性もある。

以上より、単回帰分析と重回帰分析において、横型個人主義、縦型個人主義得点が増加するほど、EOT 得点が減少する結果が見られず、「欧米的価値観を持つほど EOT 得点が低い」という仮説が支持されなかった。

重回帰分析の結果、横型集団主義得点が高いほど DDF 得点が低下することが示された。先行研究の Dere et al. (2012) および Dere et al. (2013) では、アジア的価値観を 1 つの変数としてアレキシサイミア傾向との関連を検討したが、有意な関連は認められなかった。本研究で横型集団主義が DDF 特性と負の関連を示したことが、今後アジア的価値観を「横型集団主義」と「縦型個人主義」に分けてアレキシサイミア傾向との関連を検討する必要性を示唆している。

文化とアレキシサイミアの関連に対する検討

本研究の結果を踏まえて、文化とアレキシサイミアの関連について検討する。

今回の研究では、TAS-20 の 3 因子 (DIF, DDF, EOT) のうち、EOT 得点は文化的変数との関連を示さなかったが、DIF 得点、DDF 得点、および TAS-20 総得点は文化的変数との関連を示した。この結果は、「EOT のみが文化の影響を受ける」とする先行研究の主張を支持せず、DIF や DDF も文化の影響を受ける可能性を示唆している。DIF は自分の感情を認識する困難さを、DDF は自分の感情を表出する困難さを意味するが、そもそも感情の認識や表出がどの程度求められるかは文化によって異なる可能性がある。そのため、EOT だけでなく DIF や DDF も文化の影響を受けると考えられる。TAS-20 の 3 因子と文化との関連については、今後さらなる検討が必要である。

アレキシサイミアはアメリカで提案された概念であるが、感情の認識や表出は文化と強く関連するため、アレキシサイミア研究においては文化的背景を考慮する必要がある。また、アレキシサイミアが具体的にどのような文化的価値観と、どのように関連するのかについては、今後さらに詳細な検討が求められる。

本研究の限界

本研究では表情判断タスクを文化的価値観の測定に用いたが、その妥当性は必ずしも明らかではない。そのため、本研究で得られた表情判断タスクの結果に関する考察は、参考的な位置づけにとどめたい。表情判断タスクによって文化的価値観を測定できるとすれば、質問紙法よりも客観的な方法となる可能性がある。本研究では中心喜び背景喜び条件と中心喜び背景怒り条件の差は横型個人主義と有意な相関を示し、表情判断タスクで文化的価値観を測定することの可能性を示した。ただし、どのような表情判断タスクの、どの方向性の結果が文化的価

価値観を測定できるか、測定するのはどのような文化的価値観なのかについて、今後さらに系統的に検討し、表情判断タスクの文化的価値観の測定法としての妥当性を明らかにしていく必要がある。

また、本研究はアレキシサイミア傾向と文化的価値観との関連を検討しているが、同一文化圏の参加者を対象にしたため、調査結果が文化自体とどのように関連するかについて強く主張するのは難しい。この点について、今後は異なる文化圏の参加者を比較する研究が求められる。

さらに、本研究では独自にICSの中国語版を作成したが、その妥当性は検証されていない。今後は、ICS中国語版の作成手順の整備と妥当性の検討を行う必要がある。

引用文献

- Dere, J., Falk, C. F., & Ryder, A. G. (2012). Unpacking cultural differences in Alexithymia: The role of cultural values among Euro-Canadian and Chinese - Canadian students. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43, 1297-1312.
- Dere, J., Tang, Q., Zhu, X., Cai, L., Yao, S., & Ryder, A. G. (2013). The cultural shaping of alexithymia: Values and externally oriented thinking in a Chinese clinical sample. *Comprehensive Psychiatry*, 54, 362-368.
- 小嶋外弘 (1975). 質問紙調査法の技法に関する検討 続 有恒・八木 晃 (監修) 続 有恒・村上英治 (編) 心理学研究法 第9巻 質問紙調査 (pp. 224-271) 東京大学出版会.
- 小塚千絵 (2005). アレキシサイミアと共感性欠如一内在他者意識と表情認識に着目して— カウンセリング研究, 38, 44-50.
- Liu, F., Li, C., & Gao, X. (2018). Reliability and Validity of the Chinese Version of the Male Role Norms Inventory-Revised. *Advances in Psychology*, 8, 120-130.
- Mann, L.S., Wise, T. N., Trinidad, A., & Kohanski, R. (1995). Alexithymia, affect recognition, and five factors of personality in substance abusers. Perceptual and Motor Skills, 81 (1), 35-40. <https://doi.org/10.2466/pms.1995.81.1.35>
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & van de Veerdonk, E. (2008). Placing the Face in Context: Cultural Differences in the Perception of Facial Emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 365-381.
- 松下優衣・石田 弓 (2012) アレキシサイミア傾向と身体 の 捉 え 方 と の 関 連. 広島大学心理学研究, 12, 179-196.
- Pandey, R., & Mandal, M. K. (1997). Processing of facial expressions of emotion and alexithymia. *British Journal of Clinical Psychology*, 36, 631-633. <https://doi.org/10.1111/j.2044-8260.1997.tb01269.x>
- Parker, J. D., Taylor, G. J., Bagby, R. M. (1993). Alexithymia and the recognition of facial expressions of emotion, *Psychother Psychosom*, 59 (3-4), 197-202. <https://doi.org/10.1159/000288664>
- Ryder, A. G., Yang, J., Zhu, X., Yao, S., Yi, J., Heine, S. J., & Bagby, R. M. (2008). The Cultural Shaping of Depression: Somatic Symptoms in China, Psychological Symptoms in North America? *Journal of Abnormal Psychology*, 117, 300-313.
- Sifneos, P. E. (1973). The Prevalence of "Alexithymic" Characteristics in Psychosomatic Patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 22, 255-262.
- Singelis, T. M., Dharm, H. C. T., Bhawuk, R. S., & Gelfand, M. J. (1995). Horizontal and Vertical Dimensions of Individualism and Collectivism: A Theoretical and Measurement Refinement. *Cross-Cultural Research*, 29, 204-275.
- Taylor, G. J., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. (1997). Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Triandis, H. C. (1995). Individualism and collectivism. NY: Westview Press.
- Yuan, Y., Shen, X., Zhang, X., Wu, A., Sun, H., Zhang, N., Zhang, X., & Li, H. (2003). The reliability and validity of Toronto alexithymia scale (TAS - 20). *Sichuan Mental Health*, 16, 25-27.